

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：64302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350370

研究課題名(和文) 日本統治期朝鮮の医療衛生政策と医学者

研究課題名(英文) Medical Policy and Medical Scientists in Colonial Korea

研究代表者

松田 利彦 (Matsuda, Toshihiko)

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：50252408

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：植民地朝鮮における京城帝国大学(1926年開学)の創設過程および医学部の教員の動向、志賀潔医学部長の朝鮮での活動を研究した。特に赤痢菌発見者として知られる志賀潔が、京城帝国大学医学部長時代、実験中心のドイツ医学の限界を意識し、臨床を重視するアメリカ医学に関心を持ち、京城帝国大学および朝鮮総督府医院の改革構想をもっていたことを明らかにした。また志賀の改革構想のもと京城帝大医学部でアメリカ式の公衆医学を収めた水島治夫の行跡についても考察した。

研究成果の概要(英文)：This study deals with Keijo Imperial University, which was founded in Colonial Korea in 1926, the medical scientists in the medical department there and the activities of Shiga Kiyoshi, who was dean of the medical department. I especially pay attention to Shiga's idea of making reform of the medical department of Keijo Imperial University and Chosen Government General's Hospital, which shows that Shiga recognized the limit of experiment-oriented German medicine and instead had interest in the American Medicine, which attached importance to clinical medicine. I also examined the achievements of Mizushima Haruo, who, under the influence of Shiga's reform plan, studied in the U.S. to master American public health.

研究分野：近代日朝関係史

キーワード：植民地 朝鮮 医学 志賀潔 ロックフェラー 京城帝国大学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の松田利彦は、2009 年以來、朝鮮における「学知」の研究を進め、日本統治期における京城帝国大学の創設（1926 年）について研究を進めた。酒井哲哉・松田利彦編『帝国日本と植民地大学』では、特に同大学医学部の創設の中心となった志賀潔に焦点を合わせ、その大学設立構想について論じる予定である。本研究「日本統治期朝鮮の医療衛生政策と医学者」は、直接的には、この研究を敷衍・拡大する試みとして開始された。

また、研究代表者は、著書『日本の朝鮮植民地支配と警察 1905～1945 年』（校倉書房、2009 年）を通じて、日本統治下の朝鮮における警察制度の変遷および治安政策・警察行政の展開を明らかにした。同書では、警察の管掌した衛生警察についても論及している。さらに、松田利彦・やまだあつし共編著『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』（思文閣出版、2009 年）、松田利彦・陳延媛共編著『地域社会から見る帝国日本と植民地 朝鮮・台湾・満洲』（思文閣出版、2013 年）などで、朝鮮史研究者と台湾史研究者の視角の差異を明確化することで双方の研究史の欠落部分を補完することを旨とする「相互参照」という考え方を追究してきた。

これらの研究過程で、植民地衛生官僚と植民地大学医学部の生み出した学問知識の関連性に関心を抱くようになった。

2. 研究の目的

本研究「日本統治期朝鮮の医療衛生政策と医学者」は、日露戦争期から 1920 年代にかけての朝鮮における医療衛生政策の変遷を跡づける。あわせて、それにかかわった医学関係者の個人史をたどることで植民地統治と医療の共存と相剋の様相を具体的に描き出すことを目指す。

第一に、軍陣医学が朝鮮統治期初期の医療衛生政策の形成にどのような影響を及ぼしたかという点である。兵士の衛生管理が大きな課題となった日露戦争（1904～1905 年）では、韓国駐劄軍は占領地の衛生管理、感染症の防止につとめた。こうした軍陣医学を基軸とする医療衛生体制は、韓国「併合」（1910 年）以後も継続し、憲兵警察制度のもと憲兵・軍医が大きな役割を果たしたと思われる。これは同時代の台湾といちじるしい対照をなすが、その具体相を明らかにする。

第二は、朝鮮 3・1 独立運動（1919 年）による陸軍の朝鮮支配からの後退と、朝鮮総督府への内務官僚の大量移入がもたらした医療衛生政策の変化という問題である。3・1 運動後、衛生行政は内務省出身官僚の手に移るが、このとき、台湾や中国大陸で医療事業を展開していた北里柴三郎系の医学者が医療衛生政策の転換に寄与した。こうした統治体制の転換や人事異動との関連のなかで 1920 年代の医療衛生政策の展開を考究したい。

第三は、上記のような政策の変遷に関わった医学関係者を取りあげ、その個人史から帝国日本の医療・衛生を照射するという課題である。具体的には、朝鮮総督府医院院長・同附属医学校校長をつとめた藤田嗣章・芳賀栄次郎らの事績を追う。また、1920 年代については、医療衛生政策の転換を体現した人物として志賀潔に着目している。

3. 研究の方法

（1）文献の購入：初年度を中心に本研究関連の基礎文献や公刊史料を購入し先行研究を整理すると共に、本研究全体を貫く分析枠組みを探索する。

（2）国内外の史料調査の実施：国内の史料調査については、京都で、京都大学の中央図書館、人文科学研究所図書室、および国際日本文化研究センターが所蔵する新聞・雑誌類の調査を行った。東京等では未公開一次史料の調査を国立国会図書館憲政資料室、外務省外交史料館、国立公文書館所蔵の公文書、国文学研究資料館、萩博物館、北海道大学、岡山大学、金沢大学等で行った。加えて、個人所蔵の文書については、所蔵者と直接コンタクトをとり、利用の許可を得た。国外の史料調査は、米国、韓国、台湾で実施した。

（3）研究成果の公表：日本・韓国・台湾で成果を口頭発表及び学術論文の形で発表した。

4. 研究成果

（1）平成 26 年度：基礎的文献として、近代日本医学史・植民地医学史についての研究書および日本統治期朝鮮の医学者の回想録類の収集につとめた。特に本研究の骨子となる未公開一次史料の調査に力を入れた。国内では、京都（京都大学中央図書館、同医学部図書室、同人文科学研究所図書室、京都府立医科大学図書館および国際日本文化研究センターなど）や東京（国立国会図書館憲政資料室、防衛庁防衛研究所図書室、外務省外交史料館など）が中心となった。『医海時報』『満鮮之医界』『朝鮮之衛生』などの雑誌類の調査を進めた。特記すべきものとしては、萩博物館で 1910 年代の総督府衛生顧問をつとめた山根正次の文書、山口県立図書館で 1920 年代の朝鮮総督政務総監だった湯浅倉平の関連文書、北海道大学医学部図書館で朝鮮各道の衛生要覧・衛生統計など、これまでほとんど利用されていなかった資料を収集した。国外では、韓国でソウル大学図書館、同医学部図書館、国会図書館などで、総督府刊行の衛生調査類を収集した。

研究成果の発表としては日本国内及び韓国で成果を発表した。京城帝国大学の創設過程と今後の課題をめぐって、同志社コリア研究センターおよびソウル大学校奎章閣で発表した。また、1920 年代の朝鮮における医療政策の中心となった志賀潔について、翰林大学校日本学研究所・ソウル大学校医科大

学校で発表した。また、これらを踏まえた研究論文として、「志賀潔と植民地朝鮮」(『翰林日本学』第25輯、2014年12月)を公刊した。

(2)平成27年度:国内外の資料調査は以下の通りである。4月、米国 Rockefeller Archive Center, Presbyterian Historical Society, American Philosophical Society で調査を行った。1920年代における京城帝国大学医学部に対するロックフェラー財団の援助計画についての資料を発掘し「ロックフェラー財団と植民地朝鮮の医療衛生改革構想 京城帝国大学医学部長志賀潔との交渉を中心に」(ワークショップ「植民地帝国日本における知と権力」2015年10月26日、中央研究院台湾史研究所)で発表した。同8月韓国ソウルにて、姜南紅氏に植民地期朝鮮の東亜聯盟運動に関するインタビューを行い著書『東亜聯盟運動と朝鮮・朝鮮人』(有志舎、2015年)に反映した。

そのほか海外では、韓国国会図書館、台湾国立中央図書館、国内では、国会図書館、東京大学医学図書館、徳富蘇峰記念館、東北大学医学部図書館、国立公文書館、豊田赤十字看護大学等で、京城帝国大学医学部における公衆衛生学研究の系譜、日本赤十字社の植民地朝鮮での活動などの調査をした。関連研究として「1910年代における朝鮮総督府の国境警備政策」(『人文学報』第106号、2015年4月)、「Les KEMPEITAI et l'expansion du Japon imperial a Taiwan en Corée et en Chine au debut du XXe siecle」, Arnaud Houte et Jean-Noel Luc eds., Les Gendarmeries dans le monde, de la Revolution française a nos jours, (Paris: Presses universitaires Paris Sorbonne, 2016.2)を発表した。

(3)平成28年度

最終年度のため成果発表に重点を置いた。7月、韓国・翰林大学校日本学研究所にて国際シンポジウム「帝国日本におけるコロニアリズムと知の連鎖」での報告として「植民地朝鮮における公衆衛生学のある系譜」を発表した。11月、韓国で開催された東アジア日本研究者協議会第1回大会松島コンベンシア(韓国仁川市)にて「帝国史」の視点からの植民地大学研究 課題と可能性」を発表した。12月、総合研究大学院大学「総研大文化フォーラム2017 異文化へ旅する/異文化を旅する」(京都)にて「細菌学者・志賀潔の異邦/異分野への旅」を発表した。関連研究として、関周一編『日朝関係史』(吉川弘文館、2017年2月)に執筆、「日立就職差別事件」以後の在日韓国人の権利戦取運動、青巖大学校在日コリアン研究所編『在日コリアン運動の抵抗的アイデンティティ』(図書出版ソニン、2016年7月)、「日帝強占期、日本朝鮮関係記録 朝鮮植民地支配における政策担当者の個人記録を中心に」韓日文化交流基金編『韓日両国、互いを以下に記録したか』(景仁文化社、2017年2

月、原文韓国語)「一九二七年、植民地朝鮮における華僑排斥事件」(『東京大学韓国朝鮮文化研究』第16号、2017年3月)を刊行した。

国内外の調査としては、同年7-8月、アメリカ合衆国に出張し、ジョンズホプキンス大学医学文書館、ロックフェラーアーカイブセンター、ハーバード大学で、戦前期の日本人・朝鮮人医学生のアメリカ留学、ロックフェラー財団のフェロシップ記録、ロックフェラー財団理事の個人文書などの資料調査を行った。このほか、海外で、韓国国会図書館、延世大学校、国内で、国会図書館、江原素六記念館、重監房資料館、金沢大学医学図書館などで調査を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

松田利彦、[韓国語]「朝鮮学校の最近の変化」をめぐると諸問題」(青巖大学校在日コリアン研究所編『在日コリアンの生活文化と変容』図書出版ソニン、2014年10月、105~133頁)査読なし

松田利彦、[日本語及び韓国語]「志賀潔と植民地朝鮮」(『翰林日本学』第25輯、2014年12月)5~31頁(韓国語版は同上、33~58頁に所収)査読あり

松田利彦、「朝鮮総督府初期の日本人官吏形成過程・構造・心性」(『東洋文化研究(学習院大学東洋文化研究所)』第17号、2015年3月、105~149頁)査読なし

松田利彦、「1910年代における朝鮮総督府の国境警備政策」(『人文学報』第106号、2015年4月、53~79頁)査読あり

松田利彦、[フランス語]「Les KEMPEITAI et l'expansion du Japon impérial à Taiwan, en Corée et en Chine au début du XXe siècle」, Arnaud Houte et Jean-Noël Luc eds., Les Gendarmeries dans le monde, de la Révolution française à nos jours, (Paris: Presses universitaires Paris Sorbonne, 2016.2, pp.267-282). 査読なし

松田利彦、[韓国語]「日立就職差別事件」以後の在日韓国人の権利戦取運動、青巖大学校在日コリアン研究所編『在日コリアン運動の抵抗的アイデンティティ』(図書出版ソニン、2016年7月、383~401頁)査読なし

松田利彦、[韓国語]「日帝強占期、日本の朝鮮関係 記録 朝鮮植民地支配における政策担当者の個人記録を中心に」韓日文化交流基金編『韓日両国、互いをい

に記録したか?』(景仁文化社、2017年2月、333~390頁) 査読なし

松田利彦、「近代東アジアのなかの日朝関係」(関周一編『日朝関係史』(吉川弘文館、2017年2月、241~321頁) 査読なし

松田利彦、「一九二七年、植民地朝鮮における華僑排斥事件」(『東京大学韓国朝鮮文化研究』第16号、2017年3月、1~24頁) 査読なし

〔学会発表〕(計 14 件)

松田利彦、[韓国語]「辛珠栢編『韓国人文学の制度化：1910~1959年』第1部書評 主として植民地大学史研究の立場から」(同志社コリア研究センター・延世大学校国学研究院 HK 事業団共催「韓国近現代学術史研究の現状と課題」2014年5月23日、同志社コリア研究センター(京都市上京区)にて行う。)

松田利彦、[韓国語]「日立採用差別裁判」以降の在日コリアンの権利戦取運動」(青嵐大学校在日コリアン研究センター主催シンポジウム「在日コリアン運動」と抵抗的アイデンティティ」2014年5月30日、高麗大学校日本研究センター(韓国ソウル市)にて行う。)

松田利彦、[韓国語]「志賀潔と植民地朝鮮」(翰林大学校日本学研究所主催・第16回専門家招聘懇談会「帝国日本の文化権力：学知と文化媒体」2014年10月31日、翰林大学校日本学研究所日本学図書館(韓国春川市)にて行う。)

松田利彦、[韓国語]「志賀潔と植民地朝鮮」(ソウル大学校医科大学校医史学教室セミナー、2014年11月1日、ソウル大学校医科大学校医史学教室会議室(韓国ソウル市)にて行う。)

松田利彦、[韓国語]「京城帝国大学研究の方向性について」(ソウル大学校奎章閣著者特講、2015年1月19日、ソウル大学校奎章閣(韓国ソウル市)にて行う。)

松田利彦、「戦後日本における韓国・朝鮮認識をめぐって」(「グローバル時代に対応する新たな歴史教育戦略の構築に関する国際比較研究」第1回研究会、2015年8月5日、中之島公会堂(大阪市)にて行う。)

松田利彦、「ロックフェラー財団と植民地朝鮮の医療衛生改革構想 京城帝国大学医学部長志賀潔との交渉を中心に」(国際日本文化研究センター・中央研究院台湾史研究所共催ワークショップ「植民地帝国日本における知と権力」2015年10月26日、中央研究院台湾史研究所(台湾台北市)にて行う。)

松田利彦、「戦後日本の韓国認識 植民地支配問題を中心に」(韓国日本学会招聘講演、2016年2月13日、誠心女子大学(韓国ソウル市)にて行う。)

松田利彦、「1950年代末~1960年代における在日韓国人の民族統一運動 『統一朝鮮新聞』の分析を軸に」(青嵐大学校在日コリアン研究所・東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構アジア地域研究センター韓国学研究部門・東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻・文部科学省科学研究費基盤B「移民と故郷」主催国際学術大会「東アジア及び世界の中の在日コリアン 現在と未来」2016年5月28日、東京大学駒場キャンパス(東京都)にて行う。)

松田利彦、[韓国語]「植民地朝鮮における公衆衛生学のある系譜」(国際日本文化研究センター共同研究「植民地帝国日本における知と権力」・翰林大学校日本学研究所共催シンポジウム「帝国日本におけるコロニアリズムと知の連鎖」2016年6月30日、翰林大学校(韓国春川市)にて行う。)

松田利彦、[韓国語]「日帝強占期、日本の朝鮮関係記録 朝鮮植民地支配における政策担当者の個人記録を中心に」(韓国文化交流基金主催シンポジウム「韓日両国、お互いをどのように記録したか?」2016年9月23日、ケンシントンホテル(韓国ソウル市)にて行う。)

松田利彦、「『帝国史』の視点からの植民地大学研究 課題と可能性」(東アジア日本研究者協議会第1回大会・共同パネル「近代日本を『帝国』から考える」2016年11月30日、松島コンベンシア(韓国仁川市)にて行う。)

〔図書〕(計 2 件)

松田利彦・岡崎まゆみ共編著『植民地裁判資料の活用 韓国法院記録保存所所蔵・日本統治期朝鮮の民事判決文資料を用いて』(国際日本文化研究センター、2015年、104頁)

松田利彦、『東亜聯盟運動と朝鮮・朝鮮人』(単著、有志舎、2015年、222+7頁)

〔その他〕

ホームページ等

<http://research.nichibun.ac.jp/ja/researcher/staff/s026/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田 利彦 (MATSUDA Toshihiko)

国際日本文化研究センター・研究部・教授

研究者番号：50252408